

地域活動による学生のマナー指導

日 高 良 和*

Manner guidance of students by community activities

Yoshikazu HITAKA

Abstract : This paper is reported the guidance in which students acquires a manner by themselves through community activities. In recent years, it becomes often that a school does an action in cooperation with community. Therefore, the opportunities when students participates in these community activities increase. Students have a relation with various people by this action. It is necessary for students to take communication with experienced people and children. Students get possible to behave the correspondence that accepted a purpose through experience. As a result, students can acquire a social manner.

Key words: a social manner , community

1. まえがき

子ども達の理科離れ対策や科学技術への興味の高さから、各地の科学館やテレビ番組で科学教室やサイエンスショーなどが頻繁に行われている。また、自治体においても地域の子どもたちに工作の大切さや身近にある生活品の原理などを教えるために工作教室などが開催されることが多くなってきている。しかし、このような科学教室や工作教室を開くには単独の組織では内容が固定化したり、運営スタッフの面で限界がある。そのため、工業高等専門学校や大学などが協力を行う機会も増加してきている。

一方、高専や大学では地域連携事業として地域住民の方々に役立つような事業の展開や、学生が地域社会で学ぶ機会をもつインターンシップなどが行われだしている。特に、学生のインターンシップは、学生の就業意識を高め、学校の勉学にどのようなことが必要であるかを再確認してもらえる有効なカリキュラムである。このカリキュラムに参加した学生たちは、「学校で勉強することの意義を確認した」、「社会生活を送る上で必要なマナーを学んだ」と感想を口にする。このよ

うに学外における教育は学生の社会性を高めるにはよい機会であるといえる。しかし、インターンシップのカリキュラムは実施期間が限定されているため、学生たちにこのような機会を常に与えることは難しい。

本稿は、学生たちに地域で開催されることが多くなった子ども向けの工作教室や展示会を活用して社会性を持たせるための指導について紹介する。この指導法は、学生がこのような教室などにスタッフや指導者として関わることで主催者との打ち合わせなどに参加する機会を設け、マナーを身につけさせるものである。学生は、いろいろな場面や立場によって、どのような振る舞いが必要であるかを体験しながら学んでゆける。このような指導を受けた学生は学校生活でも挨拶をよくするなどマナーも良くなっている。

2. 地域活動について

本稿が取り扱う地域活動は地域の市町村などの自治体や自治会、小・中学校が主催となって開催される工作教室や展示会である。通常、工作教室は参加者が20名から40名の規模であり、半日や1日で開催されることが多い。教室の運営予算は、主催者が一部負担し工作に使う材料などにかかる費用を参加費とする

(2005年12月24日受理)

*宇部工業高等専門学校電気工学科

場合が一般的であるが、企業の科学技術振興の助成金[1]を受けることもある。参加費を徴収する場合は、500円程度として、それに見合った内容の工作物を用意する。また、展示会は高専ロボットコンテストなどで使用したロボットや研究活動の紹介などがあり、不特定多数の参加者を相手にデモンストレーションや説明を行うような活動である。展示会については、学生が日ごろから学校で行っている活動を紹介する内容であるから比較的取り組みは容易である。

3. 学生のマナー指導

本論文で提案する「マナー指導」は、本来ならば教育を受ける立場の学生が工作教室や展示会の主催者と打ち合わせを行ったり、参加者の子どもたちへ指導を行いながら良好なコミュニケーションをとれるようにマナーを身につけようと言うものである。たとえば、工作教室の依頼を受けて実施する場合、次のような工程が必要である。

- ① 開催日や内容の選定
- ② スタッフの人数や材料、道具などの手配
- ③ 配布資料の作成
- ④ 当日の司会などの教室運営
- ⑤ 当日の参加者に対する工作指導

学生たちは、工作指導である工程の5番から経験を積み、次第に教室運営や材料手配などの一連のことが体験できるようにしている。その各工程において、写真1に示すような主催者との打ち合わせ、当日の参加者への説明などコミュニケーションをとる場面が生じる。その場面場面にに応じて指導教員は学生に対して挨拶の仕方や言葉遣いなどを指導してゆく。また、主催者にも、学生の振る舞いに間違いがあった時には、学

生に直接注意をしていただくようお願いしておく。このとき、学生は主催者にとってお客ではなく、依頼した仕事をやってもらうスタッフであることを理解してもらうことが大事である。このような理解が無ければ、学生も緊張感が無くなり責任感を持つことが難しくなるからである。

4. 提案方法の実施例

高専ロボットコンテストの担当を行っている関係から、市内の自治体や小学校などから年間で10件程度の工作教室や展示会の依頼がある。そのため、ロボコンに関わっている学生や電気工学科4年・5年生の有志を募って、このような依頼に対応している。写真2、写真3は、宇部市教育委員会生涯学習課から協力依頼があった「夏休み工作教室」の実施風景である。



写真2 開催前の打ち合わせ風景



写真1 主催者と学生の打ち合わせ風景



写真3 学生による進行風景

この工作教室の参加対象者は宇部市の小学生5、6年生であり、1日20名定員で2日間行った。スタッフはこれまで2度の経験がある5名の電気工学科4年生と5年生の学生が担当した。学生が指導者となって子どもたちに工作指導を行うのであるが、3度目の経験となると専門用語を使わずに説明することや黒板に書いた漢字が参加者にわかるかななどを配慮して教室を進めることができ、写真4に示すようにコミュニケーションが十分にとれるようになっていた。また、写真5のように保護者からの突然の質問などにも笑顔で答えられるようになっていった。参加した子ども達やその保護者の方々からの学生たちの評価は良いものであった。また、指導中に帽子をかぶっていることを主催者から注意される場面もあった。このような経験を学生たちがすることによって、社会的マナーを身につけているといえる。

5. まとめ

工作教室などの地域活動によって、学生たちがいろいろな人とコミュニケーションをとる機会を作り、学生たちにマナーを身につけさせる指導について報告した。本指導法によって、学生たちに社会的マナーを体験的に身につけさせることができたと言える。しかし、その客観的な評価方法については、これからの課題となる。また、指導を受けることができる学生も少数であると言う問題もある。

最後に、協力を頂いた宇部市生涯学習課の皆様に感謝いたします。

参考文献

[1]財団法人マツダ財団 科学技術振興事業助成



写真4 子ども達と学生の交流風景



写真5 学生の保護者への説明風景